慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 経済学会報告会論題 |
| Sub Title | |
| Author | |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1957 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.50, No.9 (1957. 9) ,p.841(73)- |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19570901-0073 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

問題内における一定観点、つまり科学的に封鎖性を確立し得る様な一定観点と態度決定の問題にこれをもちこんだのである。[注11] それ故に又倫理学との関係に関する限り、彼は行為せずにはいられないという意味でその倫理的、倫理学的要素を重視するが、しかしそれはあくまでも「行為価値は科学にすら規制されない」[注12]という関係で実際的活動にとっては一つの収益性要素でしかないのであるから、[注13] 経営経済学的な一つの観点から体系化する場合、それには補助科学という位置を与えたのである。[注14]

ここにいたってリゾブスキーは、若しも観点と封鎖性が科学を性格付けるにしても、やはり科学自体の持つ特性は一体何であるかということにその考察の目を向け、自然科学、精神科学、経済科学と経営経済学間の相違を明らかにしようとするのである。（尚この中精神科学の彼の規定は現在の私には組みし得ない多くの主張が含まれるから、[注15] ここでは特に自然科学と経済学の関係だけを取り上げてみたいと思う。）

さて自然科学と経営経済学をも含めた経済科学との関係について、彼はその法則性の分析、検討から取り扱っている。そしてこの場合においても経済科学に於ては人間の社会的活動が対象とせられる限り、「原因と結果とを数学的方法で凡て表現しうる程明白にして窮極的法則に具体的経営経済現象を還元することは不可能である」[注16] といういわゆる不可知論的立場に立ち、たとえ数学的方法を採用してもそれは一つの立場に立った上での蓋然性を表示し得るのみであると主張しているのである。[注17] 又経済科学では実験が不可能であるために、「一定条件の孤立化及び技術的製成そしてその確定は全体として生活している人間には不可能である」[注18] とも説明している。即ち彼によれば正に不可知論と人間行為の不合理性に立脚し、自然科学と経済科学間に内容的同一性は決して存在しないが、形式的同質性は後者が一定の観点に立って理想型的な構成を志向する限り成り立ち得るというのである。[注19] しかしとも角彼の場合経営経済学を余りにも自然科学的に形成し、且つ完全法則性の意味を与えることは否定されていることは注意すべきであろう。

斯くしてリゾブスキーの場合、多くの不備にかかわらず、例えば我々の最も関心事たる経済科学と経営経済学の関係はその精神科学の規定の不満から敢て説明しなかったのであるが、だがそれにもかかわらず彼がニックリッシュの命題の分析から始め、倫理学の検討を通してニックリッシュ理論の持つ飛躍及び本質主義的規定を批判し、これを克服せんとしている態度、又不可知論的見知から行為自体の善悪を離れて一定の観点から科学としての封鎖性を確立せんとしている努力は、上述の現代的人間生活と行為、及び科学の位置と使命と照し合せた時、我々はその不備な点が多いにかかわらず科学としての経営経済学の方向を指示する或いは指示した学者の一人であると思う。

（注1）　リゾブスキーは一九二七年から一九五二年まで活躍したのだが、スイスという特殊事情のためか、今日まで殆どわが国の学界では問題にされなかった。

（注2）　A. Lisowsky; Grundproblem der Betriebswirtschaftslehre, St. Galten. 1954, S. 4. ff. besonders 5.

（注3）　A. Lisowsky; a. a. O., S. 7.

（注4）　A. Lisowsky; a. a. O., S. 6.

（注5）　A. Lisowsky; a. a. O., S. 10.

（注6）　A. Lisowsky; a. a. O., S. 11.

（注7）　A. Lisowsky; a. a. O., S. 16, 18,

（注8）　A. Lisowsky; a. a. O., S. 129.

（注9）　A. Lisowsky; a. a. O., S. 23. ff.

（注10）　A. Lisowsky; a. a. O., S. 25, 31, 39.

（注11）　A. Lisowsky; a. a. O., S. 31～32.

（注12）　A. Lisowsky; a. a. O., S. 20.

（注13）　A. Lisowsky; a. a. O., S. 28.

（注14）　A. Lisowsky; a. a. O., S. 31.

（注15）　リゾブスキーは精神科学の本質的特質を理解 Verstehen に置く。この考え方はやや古い客観主義の立場に関係すると思われる。従って彼は経営経済学を精神科学から簡単に除外するので、後の経済学と経営経済学の規定が曖昧になっていると思われる。

（注16）　A. Lisowsky; a. a. O., S. 89.

（注17）　A. Lisowsky; a. a. O., S. 91.

（注18）　A. Lisowsky; a. a. O., S. 91.

（注19）　A. Lisowsky; a. a. O., S. 94.

〔附言〕　リゾブスキーの自然科学・精神科学・経済科学・経営経済学の関連の論議は、本論題自体と紙数の関係から省略した。又別の機会に取り上げ、批判的検討を加えたいと思っている。

◇――――◇

## 経済学会報告会論題

| | | |
|---|---|---|
| 四月廿五日 | ロルシュ帝国賃子帳 | 宇尾野　久 |
| 五月二日 | ドイツ農民戦争の原因をめぐる諸問題 | 寺尾　誠 |
| 五月九日 | 地方経済観察の意義について | 小島　栄次 |
| 五月十六日 | 明治における経済学の発達 | 島崎　隆夫 |
| 五月廿三日 | 資本の集積・集中と分裂・分散 ――中小工業論序説―― | 北原　勇 |
| 五月卅日 | 生産性と賃金 | 尾崎　巌 |
| 六月六日 | 労働供給機構について | 小尾恵一郎 |
| 六月十三日 | 規範経営学批判 | 小島　三郎 |
| 六月廿日 | オートメーションと生産管理 | 野口　祐 |
| 六月廿七日 | 一八世紀英仏社会思想の発展と ウィリアム・ゴドウィン | 白井　厚 |
| 七月四日 | 沖縄帰朝報告 | 鈴木　諒一 |